

2025 年度 9 月 (外国語・英語)

問 1

問 2

問 3

問 4

紀貫之

問 5

問 6

問 7

貫之はそれまでと比べてより理知的な歌風を規範として確立しようとしていたため、感情の表出を優先させる業平の和歌に対して否定的な批評をしたということ。

問 8

【国文学】

一

I 群

a (柿本人麻呂)

『万葉集』第二期の歌人で、六〇〇年代後半から奈良遷都ごろに活躍した。『万葉集』における最高峰の歌人とされる。「石見相聞歌」など、枕詞・序詞・対句を駆使した優れた長歌が多い。個人の歌集に散佚した「人麻呂歌集」があった。後代に歌聖として仰がれ、平安末期には人麿影供も行われた。

b (『和漢朗詠集』)

藤原公任の撰による平安中期の歌謡集で、「和漢」は和歌と漢詩文を、「朗詠」は節をつけて歌うことを意味する。春・夏・秋・冬・雑の五部の部立の中に、朗詠に適する『白氏文集』を中心とした漢詩文の佳句約五九〇句、および『万葉集』以来の和歌約二二〇首を収める。

c (『延慶本平家物語』)

『平家物語』の最古写本で、書写年次は一三二〇年である。『平家物語』の諸本は、語り本系と読み本系に分類されるが、延慶本は読み本系に属する。語り本系が、京都の貴族社会で発生したのに対して、読み本系は、東国の武家社会から得た資料を取り入れ源氏方の動向を詳しい。

d (『閑吟集』)

室町時代の歌謡集である。成立は一五一八年で、編者は未詳。当代に流行した小歌を中心に三十一首を収める。詩型は多種多様で、七五七五形のような短小なものが多い。内容は恋の歌が大部分を占めるが、諦観をともなった現世享楽主義を歌うようなものも見られ、庶民の感情や人生観を伝えている。

e (良寛)

良寛は江戸後期の曹洞宗の禅僧であるが、歌人、漢詩人としても知られる。越後国出雲崎の名家に生まれるが、一八歳で出家、師に従って備中国で修行する。その後の西国を遍歴するが、越後に戻り草庵に暮らした。和歌集に『布留散東』『久賀美』があり、旅や草庵の心を詠んだものに特徴がある。漢詩集に『草堂集』がある。

II 群

a 『草枕』

夏目漱石が明治三九年『新小説』に発表した小説。ロマンチズムの傾向の色濃い芸術観と、写生文の方法とが合わさった作。俗塵を離れた心持ちになれる詩こそが真の芸術だという独自の文学観、いわゆる非人情の美学が語られるが、この文学観は後に作者によって否定されることになった。

b 『父帰る』

菊池寛が大正六年『新思潮』に発表した戯曲。近代一幕物の代表作。後、市川猿之助の春秋座により、新富座で上演され、好評を博した。「父」とは何か、「父」に対する義理や情愛の念はいかにして抱かれるべきかを問うが、長子が父を呼び戻しにいく結末については、様々な評価がある。

c 『萱草に寄す』 立原道造の第一詩集。楽譜になぞらえた薄い詩集で、私家版として昭和十二年に刊行された。『新古今和歌集』を自在に摂取した十四行詩が三部構成で収められ、なかでも「SONATINE No. 1」には立原の代表作といえる「はじめてのものに」や「のちのおもひに」が含まれている。

二

I

問一

ほのくゝとはるこそゝらにきにけらしあまのかぐ山かすみたなびく

百首歌たてまつりし時はるのうた

式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松のとなたえくかゝる雪のたまみづ

問二

X 藤原（九条）良経

Y 後鳥羽上皇

問三

本歌は、立春の今朝、吉野山は霞んで見えているだろうと詠んだものである。当該歌は、同じく立春の霞んだ吉野山を詠みながらも、いまだ雪が降り積もっている吉野の里を詠み、春の遅い吉野の山里を実地にいる立場で詠んだ点が新しい。

問四

春を感じられない山奥の庵の松の戸に、途切れ途切れに雪解けの美しい水滴が落ちかかっているという風景。

## II

問一 谷崎潤一郎の小説「日本に於けるクリップン事件」に対して芥川龍之介が、「話の筋といふものが芸術的なものかどうか」と、疑問を投じたのを発端とする論争。複雑な話のからみあうおもしろさを強調した谷崎に対し、「話」らしい話のない小説「こそが「最も純粋な小説」である」と芥川は主張したが、論争は芥川の自死をもって閉じられた。

問二 中村武羅夫の「本格小説と心境小説と」や久米正雄の「私」小説と「心境」小説などを契機として、大正十年代の文壇で共有されるようになった概念。小説の理想像としてしばしばイメージされた一方で、身辺性、つまりは思想性や社会性の欠如が非難の対象ともなった。後者は日本文学の偏りを示すものとして、文学史家の注目を集めもした。主な作家・作品に志賀直哉「城の崎にて」、尾崎一雄「虫のいろいろ」、上林暁「聖ヨハネ病院にて」など。

問三 日本におけるプロレタリア文学は、大正末から昭和初年にかけて展開された、社会主義的ないし共産主義的な革命文学の総体を指す。『種蒔く人』を起点とし、『文芸戦線』や『戦旗』へと続く。有島武郎や芥川龍之介など、既存の作家にも強い思想的衝撃を与えた。内部ではマルクス主義や共産党との関係をめぐり分裂・結集を繰り返したが、昭和七年、国家による激しい弾圧にさらされ、主要なメンバーの大部分は投獄され、転向を強いられた。また小林多喜二は虐殺された。こうして運動は壊滅を余儀なくされた。しかしその精神は中野重治や宮本百合子を通じ、戦後の新日本文学会に引き継がれることになった。主な作家・作品に小林多喜二『蟹工船』や徳永直『太陽のない街』など。

問四 昭和十年、小林秀雄は「私小説論」で日本の近代文学のありようを、西洋のそれと対比的に分析したうえで、「マダム・ボヴァリイは私だ」という言葉で論を締めくくっている。その言葉は同時代文学における「私小説」の衰退を踏まえたうえで、文学において「私」の問題が完全に無効化されることはありえないと、印象的に告げるものだった。

## 三

※論述問題につき解答省略。

## 【国語学】

### 問題一

#### ア(ク語法)

上代語に特徴的に見られる、「散らく」「見らく」「寒けく」のように活用語の語末を「く／らく」とすることにより、「くするひと・もの・こと」といった名詞節を形成する語法。大野晋が活用語の連体形に「-*ru*」が下接することにより生じたとする説が提唱しているが、過去の助動詞「き」の場合には依然として例外が見られる。

#### イ(『和英語林集成』)

J. C. Hepburn (ヘボン)により編集刊行された日本最初の和英辞書。初版は慶応三年刊。初版から三版にかけて増加する、主に漢語から成る新語を増補しており、明治時代の語彙の更新の様子がよくわかる。また、見出しに採用された日本語のローマ字表記のうち、三版以降の表記が一般にヘボン式ローマ字と呼ばれている。

#### ウ(方言圏論)

柳田国男の『蝸牛考』により昭和五年に提唱された方言の分布に関する説。ヨーロッパの言語地理学においても既に指摘されていたように、中央(都)に新しく発生した語が広まり、古い語ほど辺境の地に追いやられた結果、新旧の語が同心円状に分布するといった指摘をいう。

#### エ(二段動詞の一段化)

古代日本語における上二段活用・下二段活用の動詞が、上一段・下一段活用に変化する現象。この変化は、「蹴(く)う↓蹴る」などのように古代にすでにその徴候が見られるが、主に中世以降用例が増加し、近世に一般化する。これは、「*ie*」という母音交替を停止し、もつばら「*φ~ru~re*」という語尾の交替による活用システムに単純化したと解釈できる。

#### オ(契沖)

江戸前期の国学者、歌人。漢籍、仏典、悉曇に精通し、「万葉代匠記」に代表される独創的な古典の注釈研究を行なうとともに、「和字正濫鈔」では古代の歴史的仮名遣いを明らかにした。文献学的方法を確立することを通して、国学を大きく展開させ、本居宣長などに影響を与えた。

### 問題二

ア 中世歌論の『手爾波大概抄』『姉小路式』、連歌論の『連理秘抄』、近世の連歌・俳諧論の『一步』などから、いくつかを例示しながら、

①近世の富士谷成章・本居宣長などの国学者における語分類意識との関係

② 同じく国学者のてにをは研究や係り結び研究との関係などについて具体例を挙げつつ、国学者たちが引き継いだ点、改良を加えた点などについて論じる。

イ 言文一致体という概念の発生時期とその定義に触れたうえで、

① 二葉亭四迷などによる初期言文一致体作品の状況

② 尾崎紅葉による「である」体の採用

③ 明治三〇年代後半から明治四十年代における確立期の言文一致体小説の到達点などについて、時期的な変遷を踏まえつつ、どのような部分にそれぞれの時期の特徴が現れるか、何をもって言文一致体の確立と捉えるかについて論じる。

ウ 語種を固有語である和語と、借用語である漢語・外来語に分けたうえで、

① それぞれの語種の形態的特徴

② それぞれの語種がカバーする品詞

③ それぞれの語種がカバーする意味分野

などについて、②・③については、借用語が日本語語彙に組み込まれていく経緯にも留意しつつ論じる。

### 問題三

※ 論述問題につき解答省略。

## 【漢文学】

### 問題一

(一)

「向隅」 大勢の人々が集まり酒を飲んで楽しむ中、一人だけ部屋の隅っこで寂しく涙を流すように、孤独に不遇をかこつこと。

「繞指」 よく鍛えた堅固な鉄も、金属疲労を起こして指に巻き付けられるほど柔弱になることから、強かったものが弱ってもろくなること。

(二)

道を守りて 途を得ること遅し

中ごろ兼ねて 乱離に遇ふ

剛腸 繞指を成し

玄鬢 垂糸に転ず  
客路 安き処少なく  
病床 穏やかなる時無し  
弟兄 消息絶え  
独り斂む 隅に向かふ眉

(三)

人の道を守ろうとすると、出世の途はなかなか得られない。  
そうするうちさらに戦乱に見舞われた。  
堅固であったはずの私の精神は、いつしか弱くもろいものになり、  
黒かった鬢の毛も、白髪に変わってしまった。  
各地を転々とする中で、落ち着ける場所はまれで、  
病の床にあつては、心穏やかな時はない。  
兄弟からの便りも絶えてしまった。  
部屋の片隅で一人、孤独と不遇に眉をひそめるばかりだ。

## 問題二

※論述問題につき解答省略。